

{一}

次のそれぞれの間に答えなさい。

問一 次の一線のカタカナを漢字に、漢字の部分をひらがなに直して答えなさい。

- 1 この小説のコウケンは読んでいない。
- 2 ご飯は少ししらした方がおいしい。
- 3 サトウの消費が増えている。
- 4 カンシヨウ的な気分になる。
- 5 気象エイセイから映像が送られてきた。
- 6 専らの評判である。
- 7 運送物の中ではカサが一番多い。
- 8 かかった費用を折半する。

問二 □には、同じ部首の漢字が入ります。例にならって、その漢字をそれぞれ書きなさい。

〈例〉ア 天□素材を使った服。 ↓ (答え) ア 然 イ 照 ウ 熱

- イ 日□時間が短くなった。
ウ 鉄は□うちに打て。

- 1 ア 約束を□んじる。
- イ 七□び八起き。
- ウ □送手段を変える。

- 2 ア 日本建築の真骨□。
- イ 銀行に□金する。
- ウ ねこの□ほどの庭。

- 3 ア この問題は□易度が高い。
- イ 日用□貨を寄付する。
- ウ 公園に□う子どもたち。

- 4 ア 金□製の器。
- イ 鬼の□ぬ間に洗濯□。
- ウ 目覚しい進□を見せる。

問三 次にあげるものは、短歌を三つの部分に分け、それぞれをばらばらにしたものです。〈例〉のAにならって、B～Eについて正しい組み合わせになるように選んで、記号で答えなさい。

〈例〉 ↓ (答え) A・4・イ

- | | | |
|------------------------|-----------|------------------------------|
| A 街をゆき子供の傍を | (1) 身にあびて | (ア) 面梨ならば山崎のみち |
| B 雪のうへに顔押しつけし
押し付けた | (2) 咲くからに | (イ) 蜜柑の香せり冬がまた来る
かりがする |
| C 向日葵は金の油を | (3) 砂浜に | (ウ) せんこう花火ぼとりと落ちぬ
落ちた |
| D 向きあいて無言の我ら | (4) 通るとき | (エ) 生命をかけてわが眺めたり
私はながめている |
| E 桜はないのちいばい
桜の花 | (5) 童らの | (オ) ゆらりと高し日のちひさきよ
高い |

〔二〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注意。 「」などは一字に数えます。

1 母は、週に一回だけわたしたちをスーパーに連れて行き、五十円ぐらいの好きなお菓子を買ってくれた。わたしたちはよく、森水のチョコボールを買った。わたしはキャラメル、おとうとはピーナッツをいつも選んだ。わたしはピーナッツの入ったお菓子が苦手で食べられなかった。

おとうとは箱の中身を三十分ですっかり食べてしまう。わたしは一日に三粒までしか食べてはいけないというルールを自分で作り、それをおとうとと同じぐらいの時間をかけて食べた。美はいま雪山で遭難して、これしか食べ物がないので、一週間過ごさなきゃいけない。そんな風に物語つきでおやつを食べているので、ゆつくりである。自分のお菓子をバリバリと食べながら、おねえちゃんあとなんこのこつてるの、とおとうとが繰り返して帰る。最後は、あーあ、もうなくなっちゃった。おねえちゃんまだある、と聞く。うん、あるよ。どれ、かして。おとうとにまだずしりと重いわたしの箱を差し出すと、彼がそれを掴んで上下に振る。箱はがしやがしやと音を立てる。それから、反対の手に持った自分の空箱も上下に振る。音はしない。いなあ、おねえちゃんのはまだいっぱいはいってる。いなあ。恨めしそうにわたしに箱を返すと、そう言い残して向こうに行ってしまう。しばらくすると、もう一度わたしのもとへ戻ってくる。ねえ、おねえちゃんまだある？ わたしは三粒以上食べずにしまっているんで、まだあるどころかあれから減っていない。また箱を取り出し、おとうとに渡す。おとうとは上下に振って、うらやましそうな顔をする。いっこちょうだい、あしがちがうんでしょ、と言う。そういうとき、こんな可愛い子がわたしのおとうとになって、と幸せになるような表情をする。そうか、違う味だから仕方ないけど自分のルールに言い訳をして、わたしはおとうとの手にチョコボールを出してあげる。小さくて可愛い手のひらが、お菓子を落とさないように一生懸命、丸いくぼみを作っている。勢いが出て三つほど出てしまっても、全部あげた。次の日も、その次の日も、毎日三粒をわたしが食べている時に必ずおとうとは隣にいた。そして毎週、わたしのお菓子の半分を食べてしまった。

2 いつだって、わたしがおねえちゃんだからって我慢させられた、と言ってしまうのか。おとうとを眺みながら考えた。

そんなことない、おねえちゃんはつまり可愛がられてるんじゃないかと、やつは返してくるだろう。そして話は結局、どっちがどれだけ損をしているかの応酬になるだろう。そうすればけんかが口論にすり替わるだけで、また哲哉の小籠り合いと変わりがなくなるだろう。でも、それではいまのわたしたちが抱えている鬱屈感を取り除くのは無理だろう。

実をいうと、何故おとうとがそれほどの反抗心をわたしに燃やすのか、よくわからなかった。わたしが一人っ子だった三歳半までの間にどれだけの養育費が注いだのか、それを取り戻そうとしているようにも思えた。けれどもわたしからすれば、この世に生まれてくることを心待ちにしていた人が、わたしよりも一人多いのがおとうとなのだ。その一人というのは、もちろんわたしのことなのだ。

3 結局は、おとうとの A に嫉妬していたと思う。ずっと、いい子にすることでしか自分は愛されたいと思っていたし、おとうとが生まれてからその役割には拍車がかかった。

おねえちゃんだから。そう言われるとわたしは張り切ったし、張り切ると両親は喜んだ。おねえちゃんだから、静かにして。おねえちゃんだから、あなたからけんかをやめなさい。おねえちゃんだから、お風呂を洗って。おねえちゃんだから、我慢して。そういう言葉をわたしはすべて受け入れた。お金がないとか、疲れたとかいう母親の言葉を聞くと、それもわたしがなんとかしなくてはいけないのではないかと焦った。自分の遊びを、読書を、のんびりする時間を放り出して、おねえちゃんとして振る舞った。うちの中では宿題をしているときだけ、その役割が免除された。わたしの成績が良かったのは、多分そのせいだ。

レストランでは、小食のくせにサイドオーダーのフライドポテトからデザートのパフェまで頼むおとうとにハラハラしながら、そこで一番安いメニューをオーダーした。お手伝いは、わたしはつまりさせられてずるいと訴えられ、おねえちゃんと同じ年になったらおとうともやるんだよと母は言い、そのままずっとわたしの仕事として家を出るまで定着した。そのうちわたしは、おとうとのせいで溜まった鬱屈感をおとうとで晴らすようになった。両親の見ていないところで、おとうとをちよつと押しついたり、つねたりしてわたしの思い通りになるときはそうした。わたしの友達におとうとが選ぶときは、ときどき仲間はずれにした。それでもわたしは、おとうとが叱られると、もうわかたつてさ、怒らないでと母の前に立ふさぎがた。逆におとうとはわたしを叱る母の脇にちよつとちよつと寄ってきて、そうだ、おねえちゃんがあるいよねえおかあさん、と

笑顔で相づちを打つたが、どっちにしても、それ以上怒れなくなったわよと、母は思い出し笑う。

結局、わたしはおとうとを愛して止まなかった。あのえくぼのできた小さな手がわたしにくれた沢山の思い出には、不安や寂しさが影を落とすことはない。おとづかいをもらえない四歳のおとうとが、誕生会でわたしの友達に混じって、小さなピンクの折り紙で包装したプレゼントをうやうやしく渡してくれたこと。中にはわたしがいつも使っている髪留めが入っていて、これ、もともとわたしのじやんとその場にいたみんなを笑わせて、照れていたこと。小学校に入りたての彼が、習いたての文字で一生懸命、大好きなパーマンのイラスト入りの手紙を書いてくれたこと。通学班でわたしに意地悪した四年生に向かって、一年坊主のくせに、おねえちゃんをいじめるな、とわたしにしがみつきのながら守ってくれたこと。

こっそり母の鏡台からわたしの髪留めを持ち去ったり、不器用に折り紙をたんでテープで留めたり、パーマンのヘルメットの丸がうまく挿けなくて、台所からコップを持ち出して鉛筆でなぞったり「ここのこれをこぼでかいたよ」と、裏返したり小さい「つ」が抜けたりする文章を書く姿が、まるで見ていたかのように想像できる。わたしをおつたり、守つたり、くすぐつたり、ちよつと握らせてくれたりするその手があるところに、ずっと知らなかつた山程の感情を、わたしは見つけてきたのだ。

4 とうとう出たのは、こんな言葉だ。本当はいつもおまえがうらやましかつたんだ。坊主頭に向かって飛び出した自分の思いに驚かされて、涙が出た。わたしの中の何か吹っ切れ、自分がやつに抱いてきた、どちらかといえば姉としては格好悪い感情を、思い出すところからひとつずつ正直に話し始めた。あのとき本当はこう思っていた、そのときはあだつたけれど言えなかつたと話したすと、ものすごく照れくさくて、うつむいたまま指はずっと、縫製のマシ目をなぞり続けた。オレだつておねえちゃんがうらやましかつた、とおとうとが初めて口を開き、自分をいつのまにかオレと呼ぶやつに驚いて顔を上げると、鼻を真っ赤にして、涙を袖でこしこし拭いていたから笑ってしまった。おねえちゃんつて、もっと強いと思つてた、とやつは言った。おまえも今日は思つてたより強かつたよ、と照れ隠しで言い返ししながら、坊主頭もオレもまだきこちなげど、話ができるじやんと、こっそりわたしは思つた。

5 結局、どうしてお日様のようなおとうとが、その光がなければ存在しない影のようなわたしを羨ましがっていたのかわからない。でも多分いまやつも同じように、先に姉ありきのオレをどうしておねえちゃんに羨ましいのか、と不思議に思っていることだろう。まあ、じゃあテレビでも見ようか、とわたしはやつを店間に追い立てる。それから、うしろ手に閉めようと手をかけたふすまを閉めずに、部屋を一人で振り返る。左右対称の本棚と机は似ているようでもはや似ていず、同じように夕日を受けてまぶしく光っていた。

(長島有里枝『昔中の記憶』による)

- (注1) 応酬……向こうが言ったのに対して、こちらも負けずにやり返すこと。
 (注2) 鬱屈感……もやもやした気持ちを晴らす場がなく、ふさぎこむこと。
 (注3) 鬱憤……発散できないで心の中にたまった不満や怒り。
 (注4) 先に姉ありきのオレ……いつも先に姉がいたという立場のオレ。

問一 右の文章は、中学生の「わたし」が、幼いころを思い出しながら、弟との関係を考えているものです。1～5の段落の中で、幼いころのことだけが書かれている段落はどこですか。その番号を答えなさい。

問二 ……線㉔「拍車がかかった」………線㉕「うやうやしく」の本文での意味として、最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ㉔「拍車がかかった」
- ア 厳しい目が寄せられた
 - イ 困難な問題が生じた
 - ウ 一段と責任が増えた
 - エ 賞賛が寄せられた
 - オ 価値が出てきた

- ㉕「うやうやしく」
- ア 礼儀正しく丁寧に
 - イ ほこらしげに
 - ウ ためらいがちに
 - エ 冗談めかして
 - オ わざとらしく

問三 ———線㉑「そんな風に物語つきでおやつを食べている」とありますが、そのとき「わたし」はどのように思っているのですか。その内容をわかりやすく説明しなさい。

問四 ———線㉒「彼がそれを掴んで上下に振る。箱はがしゃがしゃと音を立てる。それから、反対の手に持った自分の空箱も上下に振る」とありますが、ここに表れている「おとうと」の気持ちはどのようなものですか。わかりやすく説明しなさい。

問五 ———線㉓「幸せになる」………線㉔「取り戻そうとしている」とありますが、主語はだれですか。最も適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 母 イ わたし ウ おとうと エ 祖父母 オ 両親

問六 ———線㉕「そうか、違う味だから仕方ないと自分のルールに言い訳をして」とありますが、このときの「わたし」の気持ちとして、最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分はルールは守りたいと思うけれど、ルールを変えてでもチョコをあげたいほど弟をかわいいと思っている。
- イ 自分で作ったルールを守るのがいやになって、ルールを変えることを弟にも賛成してもらいたいと思っている。
- ウ 弟の前で自分のルールに言い訳を見せることで、ルールを守ることの大切さを弟に伝えたいと思っている。
- エ ルールを破ることは気が進まないが、姉として弟の犠牲になっているということをつらさを感じたいと思っている。
- オ 自分が作ったルールを破るにあたって、それを弟のせいにするには少しは気が晴れるのではないかとと思っている。

問七 Aに入る語句として、最も適切な言葉を次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 健^け気^けなところ イ 身勝^み手^てなところ ウ 大^お人^{ひと}び^びたところ
エ 甘^{あま}え^え上手^{じょうず}なところ オ ず^すず^ずう^うしいところ

問八 — 線⑥「その役割」とありますが、どのような役割ですか。解答らん^{らん}に合うように二十字以内で説明しなさい。

問九 — 線⑦「坊主頭^{ぼうしづかぶ}に向かって飛び出した自分の思いに驚かされて、涙が出た」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを説明したものと、最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 弟^{あに}のわがままをたしなめる言葉を口^{くち}にしようとしたのに、逆に弟への愛情^{あいじやう}を白状^{はくじやう}してしまったことに対して驚くと同時に、自分でもその感情^{かんじ}の深さにあきれてしまっている。
イ 自分がずつと押し隠^{かく}してきた弟への感情^{かんじ}を素直^{すぢ}に口^{くち}にしまったことに驚くと同時に、改めて自分がいかに弟に嫉妬^{しやくた}していたかを思い知^しり胸^{むね}がつまる思いである。
ウ 弟は何の疑^{うたが}いもなく姉^{あね}を慕^{たもと}っていたのに、本当はいつもうらやましい気持ち^{きもち}がぬくま^まず^ずにいたのだと本音^{ほんね}を伝^{つた}えたことで、弟を傷^やつけてしまったことに心を痛^{いた}めている。
エ 成長^{せいじやう}した弟に愛情^{あいじやう}を感じる^{かんじ}ることができずに苦しんでいる今の気持ち^{きもち}を正直^{すぢ}に伝えられず、昔^{むかし}から愛^{あい}していなかったかのように言^いってしまったことに対して後悔^{くわい}している。
オ 弟にはもはや力^{ちから}では勝^かてなくな^なったことに気づ^きいて姉^{あね}としてのプライド^{ぱいど}を傷^やつけられ、捨てゼリフ^{ぜりふ}のような言葉を吐^はくことしかできず、くやしい思い^{おも}いでいっぱいである。

問十 — 線⑧「自分をいつのまにかオレと呼ぶやつに驚いて顔を上げると、鼻^{はな}を真っ赤^{あか}にして、涙^{なみだ}を袖^{そで}でこしこし拭^{ぬぐ}いでいたから笑^{わら}ってしまった」とありますが、「わたし」はなぜ「笑^{わら}ってしまった」のですか。最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 姉^{あね}に対抗^{たいかう}しようとして、わざと強い口調^{くちやう}になっている弟に驚いて顔を上げたところ、自分が思^{おも}っていたより強い弟の姿^{すがた}があつて、たのもしく思^{おも}ったから。
イ いつの間にか自分より大人^{おとな}になってしまった弟の言葉^{ことば}を意外^{いがい}に思^{おも}って顔を上げたところ、弟が姉^{あね}を気づ^きかつて泣^ないてくれていて、その姿^{すがた}をいじらしく思^{おも}ったから。
ウ 張りつめた緊張^{きんじやう}感^{かん}の中^{なか}、「オレ」と親^{おん}しみをこめた言^いい方^{かた}をしている弟に驚いて顔を上げたところ、以前^{いぜん}のとおり変わらない弟^{あに}を見^みつけてうれしくな^なったから。
エ 自分^{自分}のことを理解^{りかい}してくれると思^{おも}っていたなかつた弟の予想^{予想}外の言葉^{ことば}に驚いて顔を上げたところ、やはり前^{まえ}と同じく自分^{自分}のことしか考^{かんが}えていない弟^{あに}にあきれたから。
オ 「オレ」と大人^{おとな}びた言^いい方^{かた}をした弟^{あに}に対して、その成長^{せいじやう}に驚いて顔を上げたところ、依然^{いぜん}として子どもらしい弟^{あに}が目の前^{まへ}にいて、その様子^{ようす}がかわいらしかったから。

問十一 — 線⑨「左右^{さゆう}対称^{たいじやう}の本棚^{ほんだな}と机^{こゝろ}は似^にているようでもはや似^にていず、同じように夕日^{ゆじ}を受けてまぶしく光^ひっていた」とありますが、これはどのようなことを言^いおうとしていますか。本文^{ぶんぶん}をふまえて自分の言葉^{ことば}で説明^{せつめい}しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注意。 、 「 」 などは一字に数えます。

僕はNHKのBSで『COOL JAPAN』というテレビ番組の司会をしています。日本に来て時間のたつていない一般外国人をゲストに、日本のさまざまなものをCOOL(かっこいい)か、かっこよくないか、あれこれ話すNHKらしいバラエティ番組です。

日本に来て、まだ1か月たつていないというフランス人の出演者が、番組が始まる前に、興奮した顔で僕に話しかけてきました。

「先週、電車の中にバッグを忘れたんです。もう、悲しくて、その話を日本人の友人にしたら、すぐにJ.R.に電話すると言っ

たんです。そんなバカなと思ったら、僕のバッグは、置き忘れた網棚の場所に、そのままあったんです！」

①彼は、目を大きく見開き、信じられないという顔をしました。

「フランスなら、間違いないでバッグはなくなっています。いえ、ヨーロッパなら、どこでもそうでしょう。持ち主が近くにいると分ると、すぐに誰かが盗んでいくんです。日本人はなんてマナーがいいんでしょう！これは奇跡です！」

興奮した早口の英語を聞きながら、僕はずっと微笑んでいました。日本人として、日本をほめられるのは、何にしても嬉しいものです。

電車は東京の山手線のようなものでした。ぐるぐると回り、大勢の乗客が乗り降りしている電車に、そのままバッグが残っていたことに、彼は本当に衝撃を受けたようでした。

が、2週間後、次の収録の時、彼は②困惑した顔で僕の前に現れました。

「今日、電車に乗っていたら、杖をついたお年寄りが乗ってきました。彼女は、プライオリティシート(優先席)の前に立つただけで、座っている日本人は誰も彼女と席を替わろうとしないんです。③みんな、下を向いたり、平気な顔で携帯電話をいじりながら座ってるんです。フランスなら、いや、ヨーロッパならどの国でも、すぐに誰かが立って彼女を座らせてあげますよ。杖をついているお年寄りを立たせるなんて信じられない！」

昨日はね、階段を女性が乳母車を抱えて降りてたんです。でも、誰も手を貸さないんですよ。彼女は必死に、赤ん坊が乗った乳母車を一人で下ろしてるんです。いったい、この国のマナーはどうなっているんですか?!

彼は、本当に理解できないという顔をしました。2週間前、この国のマナーを絶賛しただけに、本当に戸惑っているようでした。

日本人だって席は譲るよ、とあなたは思うでしょうか？

④欧米に旅行したり、住んだりした人は、欧米の人たちが、素早く席を譲ったり、乳母車の手助けを自然にすることに驚いた経験が一度や二度はあると思います。

イギリスの地下鉄に乗っている時、モヒカンヘアのパンクファッションの若者が、老人にサラリと席を譲った風景は衝撃でした。

思わず、「お前の反体制のポリシーはどうなるんだ?」と、耳にじやらりとピアスを並べ、鉦が打たれた革ジャンを着ている若者に聞きたくまりました。

そんなパンク野郎が、照れるわけでもなく、ふてくされるわけでもなく、じつに自然に席を立つのです。それは、⑤不思議な光景でした。

それ以来、僕は、日本と海外の席を譲る割合のようなものに敏感になりました。

欧米の平均は、80%を超えていると思います。目の前に老人が立てば、8割以上の確率で、欧米人は席を譲ります。

日本は、5割を切っていると思います。老人が目の前に立っていても、半分以上の場合、日本人は席を譲りません。

⑥「I」、階段を一人で乳母車を抱えて降りていく母親に「持ちましょうか?」と声をかけて助ける日本人の割合は、1割以下だと思っています。欧米だと、これも8割以上の人が、自然に手を貸します。

と書きながら、僕たちは、マナーの悪い国に住んでいるのでしょうか？

そんなことはないと思います。現に、フランス人の彼は、2週間前は絶賛していたのです。

そうです。彼の話に戻ります。彼は、困惑していたのです。

「日本人はマナーがいいのか悪いのか、さっぱり分かりません！」

あなたなら、なんと答えますか？

そもそも『COOL JAPAN』という番組は、こういう日本人と外国人の意識の違いを見つけ、考え、楽しむ内容なのです。僕は、しばらく考えました。

そして、じつは、網棚に残ったバッグも、席を譲らない日本人も、同じ理由から生まれているんじゃないかと、結論したのです。

日本人は同じ理由から、正反対のマナーだと思われる行動を取っているんじゃないか。それは、以下のようなエピソードに思い当たったからです。

電車で、たまにおばさんたちの団体さんに遭遇します^⑤。おばさんのうち、すごく元気な人が、まず車内に飛び込み、座席を人数分、確保します。そして、後からやってくる人に「ほら、ここ！取ったわよ！」と叫びます。

席を取ったおばさんは、他の乗客が席の近くに来て、当然のように無視して、自分の仲間を待ちます。仲間が遅れていて、他の人たちが戸惑った顔や、ちょっと怒った顔で空いている席を見ている、そんな視線をまったく気にしないかのように、自分が取った席は、自分の仲間たちの席だと確信しているのです。

席を取ったおばさんにとって、席のそばに立っている学生だったり、親子連れだったりする人たちは、存在しないのです。存在しているのは、自分の仲間たちだけです。

そういう時、なかなかやって来ない仲間のためにぼんと空いた席の前に僕は立ちながら、けれど、同じ日本人だからこそおばさんの心情がよく分かります。

おばさんは、決して、マナーが悪いのではないのです。それどころか、仲間思いのとても親切な人のはずです。困っている仲間がいれば、きっと、親身になって相談に応じたりしているのでしょう。

おばさんは、自分に関係のある世界と関係のない世界を、きつぱりと分けているだけです。それも、たぶん、無意識に。電車でこのことをずっと考えていて、このおばさんの例を思い出しました。

おばさんは、自分に関係のある世界では、親切でおせっかいな人のはずです。そして、自分とは関係のない世界に対しては、存在していないかのように関心がないのです。

この、自分に関係のある世界のことを、「世間」と呼ぶのだと思います。

そして、自分に関係のない世界のことを、「社会」と呼ぶのです。

おばさんは、「世間」に関心があっても、「社会」には関心がないのです。そして、自分の「世間」に属している人のためには必死で走り、電車の席を確保するのです。

Ⅱ、「社会」に属する人々には、おばさんは、必死になにかをする必要は感じないのです。「すみませんね。ここは、あたしたちの席なんです」と微笑みながら断る人もいれば、まったく関心がないように無表情のまま無視する人もいます。

そう考えれば、網棚に残されたバッグと、優先席で席を立たない日本人は、同じ原理＝ルールで動いているということが分かります。

ほとんどの日本人にとって、網棚に残されたバッグは、自分とは関係のない世界＝「社会」なのです。

同じく、目の前に立っている杖をついた老女もまた、関係のない世界＝「社会」なのです。

関係のない世界だから、存在しないと思つて無視したのです。それが、網棚のバッグなら「盗みのない奇跡のモラル」になり、優先席の場合なら、「足の悪い人を立たせている最悪のマナー」になるのです。

Ⅲ、電車で、熱心にお化粧をする女性は、そこが「社会」で、自分には関係がないと思つているからできるのだと思います。もし、一人でも、会社の同僚が乗り合わせて来たら、彼女は今まで通りには化粧は続けられないはず。社会「しかなかった空間に、「世間」が現れたからです。

(鴻上尚史『空気』と「世間」による)

(注1) モビカンヘアのパンクファッション……社会に対する反抗的な姿勢が表れた髪型やファッション。

(注2) 反体制……その時の支配勢力に反対すること。

(注3) ポリシー……正しいと信じて実行している方針。

(注4) エピソード……ちょっとした話。

問一 Ⅰ Ⅲ にあてはまる最も適切な言葉を次の中から選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|--------|-------|--------|--------|---------|
| Ⅰ | ア かえって | イ しかし | ウ なせなら | エ すると | オ まして |
| Ⅱ | ア しかも | イ また | ウ でも | エ ところで | オ むしろ |
| Ⅲ | ア まるで | イ さも | ウ そこで | エ ちなみに | オ とりあえず |

問二 — 線①「彼は、目を大きく見開き、信じられないという顔をしました」とありますが、何が信じられないのですか。わかりやすく説明しなさい。

問三 — 線②「困惑した顔」とありますが、その「困惑」とはどのようなものですか。文中から、それがわかる彼の言葉を三十文字でさがして、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問四 — 線③「みんな、下を向いたり、平気な顔で携帯電話をいじりながら座ってる」とありますが、この様子を表した四字熟語として最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 傍若無人 ぼうじやくぶじん イ 隨機心変 たいぎしんへん ウ 意志薄弱 いしはくじやく エ 付和雷同 ふわどうどう オ 不言実行

問五 — 線④「不思議な光景」とありますが、なぜ「不思議」だと感じたのですか。その理由として最も適切なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 日本では、同じような格好かっこうをしている若者は絶対に人の役に立つようなことはしないけれども、イギリスの若者がごく自然にさりりと席を譲ったから。
- イ 日本では、見た目の格好と行動は一致いっしすると思われやすいが、おもて立ってよいことをするのを嫌きらがりそうなイギリスの若者が自然に席を譲ったから。

ウ 日本では、マナーを大切にすることが重要視されているにもかかわらず、電車の席を譲るに関してはイギリスの方が礼儀正れいぎせいしかったから。

エ 日本では、若者が人前で席を譲るといふ機会をできれば避けようとするが、イギリスでは若者が大胆だたんに勇気をもって席を譲っているから。

オ 日本では、席は譲らなくてもよいのだという考え方がふつうになりつつあるが、イギリスでは若者が席を譲ることは義務ぎむになっているから。

問六 — 線⑤「おばさんのうち、すごく元気な人が、まず車内に飛び込み、座席を人数分、確保します。そして、後からやってくる人に、『ほら、ここ！ 取ったわよ！』と叫びます」とありますが、この行動を筆者はどのようにとらえていますか。わかりやすく説明しなさい。

問七 — 線⑥「同じ原理「ルール」とありますが、それはどのようなものですか。文中の言葉を使って、わかりやすく説明しなさい。

問八 あなたは「世間」と「社会」のどちらを優先すべきだと考えますか。解答らんに従ってどちらかを選んで、その理由をあげてあなたの考えを書きなさい。